

論文審査の要旨  
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 ( 学術 ) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	豊島 誠也
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 台湾におけるエクストリームスポーツの文化変容 – 「極限運動」の創出過程に着目して–			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		准教授	小木曾 航平
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		教 授	上田 毅
審 査 委 員 (Name of the Committee Member)		准教授	李 郁蕙
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文はエクストリームスポーツの文化変容事例を台湾に求め、伝統スポーツやその他の伝統あるものがローカルな文脈からナショナルな文脈へと置き換えられながら、ついには台湾文化と認識されるようになるまでの過程をスポーツ人類学的な視点と方法により解明している。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>第1章では中心テーマであるエクストリームスポーツの概念的検討がなされる。オルタナティブスポーツやライフスタイルスポーツといった類似概念との異同を整理し、本論文における分析概念としてのエクストリームスポーツを「危険や極限状態を含み、若者を中心として魅了していくスポーツ」と定義している。また、重要な点として台湾ではこうしたエクストリームスポーツが「極限運動」という現地語によって表現され、独自の発展を示していることが指摘される。</p> <p>第2章は、Red Bull TV が配信した「Archaic Festivals」という映像作品が分析される。Red Bull TV とはさまざまなエクストリームスポーツを支援することでも知られる Red Bull 社が手掛ける動画配信サイトである。「Archaic Festivals」は世界各地の伝統スポーツをエクストリームスポーツとして再解釈して紹介している。その理由を検討した結果、伝統スポーツとエクストリームスポーツが、「超越体験と信仰」、「危険への意識」、「勇敢さへの評価」という三つの共通要素によって関連づけられていることが判明する。</p> <p>第3章では、台湾が国家レベルで取り組む「文化創意（産業）」とエクストリームスポーツの関係について、「十鼓文創園區」と「九天盃太子極限環台賽」を事例にした現地調査の結果を踏まえつつ検討が進められる。「伝統のリノベーション」とも表される文化創意（産業）においてエクストリームスポーツが活用される背景には、台湾社会に及ぶ「本土化」の機運やそれに関連する新自由主義的イデオロギーとの相互作用が認められた。</p> <p>第4章は、台湾の伝統スポーツ「チャンゲー」のエスノグラフィーである。中国の福建省から持ち込まれたとされ、民俗行事として実践されてきたこの身体文化は今や「台湾最古のエクストリームスポーツ」と呼ばれるようになっていく。その変容の背景にある当事者らの心理的变化や葛藤、チャンゲーそれ自体の形式的変化などが丹念な参与観察と聞き取り調査の結果から明らかにされている。</p> <p>終章では、それまでの議論を踏まえ、台湾の人々がなぜ伝統あるものとエクストリームスポーツを組み合わせたという試みに向かうのかということが総合的に検討され、論文の結論が提示される。そして、21世紀以降、高揚を続ける台湾ナショナリズムを背景にしなが、極限運動は台湾らしさを表現する文化として伝統スポーツをも取り込みながら「ナショナルなもの」へと土着化され、再編成されていると結論される。</p>			

本論文は次の点で高く評価できる。

1. 少なくとも本邦においてアジア地域を対象に行われた先駆的なエクストリームスポーツ研究であり、土着化という視角を駆使して、いわゆる西洋諸国に偏っていた先行研究との理論的ギャップを埋めた点
2. エクストリームスポーツと伝統スポーツの交わりというこれまで関連性を指摘されてこなかった事象に対して、人類学的手法を用いて多角的に研究し、スポーツの人文社会科学分野に新たな知見を提供した点
3. すでに浩瀚な研究蓄積のある台湾ナショナリズム研究に対して、人々のローカルなスポーツ実践という基軸のもとアプローチし、斬新な議論を積み上げることに成功した点

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（学術）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6年 2月 7日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)